

青森が育んだ道を切り開いた女性たち

羽仁もと子

日本初の女性ジャーナリスト 「家庭」改善へ 思想広める

1873（明治6）年、八戸市に生まれたもと子は、小学生の頃から成績優秀で文部省から表彰を受けるなど才気あふれる子どもでした。青森県内には当時、女性が高等教育を受けられる学校がなかったため1889年、祖父とともに上京し府立第一高女2年に編入。さらに明治女学校を卒業し、青森

婦でありました。そのうちに新聞社を退職し家庭に入りますが、当時の家の在り方として当たり前であった「夫が言い出し、妻がそれに従う」という夫唱婦隨の家庭ではなく、夫婦の関係は全く対等。互いの短所や長所を埋め合い、伸ばしていくというものだったのです。

1921年（大正10）年、読者の子への家庭的な教育を目指して、東京に女学校「自由学園」を創立しました（現在は共学）。キリスト教精神に基づき生徒の自治を重んじるこの教育方法は世界でも注目を浴び、59歳の時にはフランス・ニースで開かれた世界新教育会議で講演を行いました。現在も

県や岩手県で教鞭をとり結婚しますが、離婚をきっかけに再び上京。「文章を書く仕事が見たい」と新聞社に応募、女性であるというだけで門前払いを受けたりもしましたが、1897年、ついに報知新聞社に入社。校正係からスタートし、自発的に書いた記事が社内でも認められ記者となりました。日本で初めての女性ジャーナリストの誕生です。

1901年、職場で知り合った羽仁吉一と再婚。当時では珍しい共稼ぎ夫



1904年には家計簿を刊行。家計に初めて「予算」の概念を持ち込んだのはもと子とされ、現在もほぼ変わらぬ様式で婦人之友社から出版されています。もと子は予定と予算で筋道の立った生活を広め、家庭経営で培った女性の力を豊かな社会の建設に向けてのことを訴え続けました。



▲羽仁もと子記念館に展示されたもと子ゆかりの品々

男女共同参画という言葉の欠片すらなかった時代に、「女性とはこうあるべき」を打ち破り様々なことを成し遂げた青森県出身の女性たちがいます。2023年に誕生150年を迎えた日本初の女性新聞記者・羽仁もと子（八戸市出身）や、ブルースの女王と呼ばれ、戦時下の弾圧にも屈しなかった歌手・淡谷のり子（青森市出身）……。逆境の中、信念を貫いた彼女たちの生き方から、現代の私たちは何を学ぶことができるでしょうか。

淡谷のり子

稀代のシャンソン歌手

戦争に負けぬ歌声

1907（明治40）年、青森市の呉服屋の娘として裕福に生まれながら、大火による実家の没落など波瀾万丈な人生の中で、歌に生きた淡谷のり子。一説には日本で初めてジャズを歌ったとも。様々なジャンルの西洋音楽のカバー曲を歌いこなし、日本におけるシャンソン歌手第一号となりました。学生時代、家計を支えるためにヌードモデルをしたり、戦時中モンペを履くのを拒み憲兵に目をつけられたりと、破天荒なエピソードは有名です。「化粧は私の戦闘準備。贅沢なんかじゃありません」「私

は、その抑圧が高まれば高まるほど、ますます細く長く眉をひき、いよいよ濃く口紅を塗ってました」。戦争一色に染まっていた中で「歌手・淡谷のり子」を貫き続け、レコードの発禁、レコード会社からの一方的な解雇などの憂き目にあっても、姿勢を曲げることはありませんでした。

晩年はテレビのバラエティ番組での歯に衣着せぬ物言いが人気を博しました。生涯現役、80歳を過ぎてでもドレスを着てハイヒールを履きステージに立ち続けた彼女は、同じ女性に向けてたくさん言葉を残しています。

「女性であることのハンディは色々な面で残っている。しかしたとえどんなに過重なハンディがあっても、本当にやりたいことがあれば道は必ず開ける」。あなたの「今」をどう生きるか。それを問いかけるのり子の言葉と生き様は、令和の世でも色褪せることはありません。



淡谷のり子「それは愛する（こと）生かす（こと）それは愛する（こと）のり子が半生を自分の言葉で語った自伝。恋愛や仕事などについて赤裸々に綴る

郡場ふみ

息子に請われ八甲田の植物採集 皇太子に講義も

大正・昭和期に功績を残した植物学者・郡場寛（弘前市出身）の母で、夫・直世と共に酸ヶ湯温泉の基礎を築きました。郡場寛は京都大学学長などを歴任し、青森県出身者で初めて弘前大学学長を務め、農学部の新設などに尽力。ふみは息子のために八甲田の貴重な植物を採集、標本にして各地の大学や研究機関へと送り、植物学の進歩に多大な影響を及ぼしました。

初めは息子に言われるがまま始めた採集ですが、続けているうちにふみ自身も植物学の知見を高め、当時の皇太子（のちの昭和天皇）が青森県を訪れた際、標本をもとに御前講義を行いました。62歳の時でした。本州の最果てである八甲田の植生が日本で早くから注目されたのは彼女の功績が大きいとされます。何歳からでも始めること、継続することの大切さを教えてくれます。

●友の会 故郷に息づくもと子の教え 「婦人之友」愛読者による「友の会」は、封建的な社会の中で孤立していた女性たちが婦人之友を通して交流し、互いの能力を生かし成長したいと1930年に正式に結成されました。2022年時点で全国に約1万5500人の会員がいます。もと子の故郷である八戸市にももちろん友の会があり、「羽仁もと子記念館・八戸友の家」を拠点に、家計や環境のことを学んだり、バザーや展示などの催しを開いたり活動を行っています。記念館ではもと子の著作のほか愛用品や幼少期の成績表など貴重な品に触れながら足跡を辿ることができます。

時代の流れにうまく乗りながら世の女性の暮らしを変え、男女共に支え合う社会を提唱し続けた女性。逆境の中、確固たる意志で自分らしい生き方を貫いた女性。きっかけはサポートする立場だとしても、やりたいことを続け、のちに名誉ある功績を残した女性。生き方は違ってもそれぞれの場面で自分らしく活躍した彼女たちの生き方が、現代の私たちに求められている多様性社会への大きなメッセージとして伝わってくるようです。

（取材：石岡 沙野）